

二〇一〇年一〇月一九日(参加者一四名)

忘れ物探しのごとく秋蝶来	明日香
稔り田のところどころに古墳見ゆ	"
うるこ雲山から海へなだれけり	"
陽光を弾きてばった飛びにけり	"
平城京ひと足ごとにはばった飛ぶ	"
秋灯し書肆に流るるジャズ親し	かれん
金色に滲む一湾秋日落つ	"
紅玉のジャムをとるとる夜の長し	"
切り株に憩ふわれらに小鳥来る	"
一陣の風に四散す稲雀	宏 虎
螻螂の闘志あらはに身構へぬ	"
新酒酌み久闊尽きぬ同窓会	"
母を撮るコスモス畑へ連れ出して	うつき
草風平城京より連れ来る	"
月へ振る鈴の音高し巫女舞へる	"
錦繡の山に数多の激戦址	菜 々
銃眼に覗きし奈落谷紅葉	"
目鼻欠く地蔵へもたれ赤まんま	"

コスモスの風の乱舞を玻璃越しに	ぼんこ
相輪の石塔尖る秋の空	"
産土神の磴へと消ゆる穴まどひ	小 袖
禅林の葉擦れかそけく竹の春	"
箒目の音符となりて木の実落つ	つくし
川舟の浮かぶ岸辺の草紅葉	こすもす
一村の老若総出秋祭	百 合
都跡とは芒原風渡る	よし子
カーブして花野に消ゆる小径かな	ひろみ
天高し奇岩奇峰の島めぐり	満 天
コスモスの百万本に空青し	"

定例会の選

二〇一〇年一〇月一九日(参加者一四名)